



浦島太郎の経済学がもたらすもの —アベノミクスと日本と世界

同志社大学大学院 ビジネス研究科 教授

浜 矩子

はじめに

本日のテーマは「浦島太郎の経済学」です。いみじくも安倍政権の政権公約の一つのキーワードは「日本を、取り戻す。」です。「取り戻す」という言葉の響きは後ろ向きで、過去におけるあるイメージの状況を取り戻すという、その感覚に非常に浦島太郎との類似性を感じ、「浦島太郎の経済学」と表現しました。

これと別の表現ですが、私の思いついた「アホノミクス」というワードが、2013年の流行語大賞の50の候補に入りましたので公のものになってしまいました。これはちょっと嬉し

目次

はじめに

1. グローバル時代における経済活動
2. グローバルジャングルの中で
3. 「シェア」から「シェア」へ

い感じです。

私は大別して二つの大きな問題点が現政権の経済運営にあると考えています。

一つ目は、「アベノミクスが何ノミクスにもあらず」ということです。経済学でも、経済分析でも、経済政策でもない。二つ目は、「アベノミクスはグローバル時代にふさわしくない」のではないかということで、より深刻な問題だと考えています。

まず「何ノミクスでもない」という点は、そこに人間が不在だと思うからです。

私は、経済活動とはすなわち人間の営みであると思います。地球上に生息している様々な生き物のなかで、経済活動を営む生き物は人間しかいません。これを踏まえておかなければなりません。したがって経済活動のあり方を議論する時に、そこに人間が不在であることはあり得ないことです。

ところが、現実をみると、経済活動が前面に出れば出るほど人間は後景に退かされてい

く実感があります。あまりにも経済性や経済効率重視ということになると、人間に対する優しさが失われていく。人権のために闘う人々がとかく経済性を目の敵にするという傾向がありますが、経済活動は本来、人間の活動であるという原理から外れてはなりません。

近ごろ「ブラック企業」という言葉が取り沙汰されています。人権を無視した人の使い方をする企業ということのようです。しかしながら本来は、そうしたブラックな行為に及ぶ企業を「企業」と呼んではいけないと思います。企業と呼ぶことで、それも企業の行動なんだと、その存在を認知してしまうことになるからです。

それと同じに人間が語られていない、活動を「経済活動」と表現してはいけないのではなかろうかと私は思います。

では、なぜアベノミクスには人間が不在であるといえるのか。それをよく示していたのが、安倍政権の成長戦略の中身だと思えます。いわゆるアベノミクスの3本目の矢です。

このスピーチを読み、私は驚きました。「人間」という言葉がたった1回しか出てきません。この貴重な1回の登場の仕方がどんな脈絡のなかであったのかというと、それは1970年の大阪万博についての話のくだりでした。

大阪万博の頃といえば、それこそ安倍首相が取り戻したいと考えている、と思われる成長真っ盛りの日本のイメージですが、そのなかで「大阪万博の会場において、『人間洗濯機』というものが話題を集めておりましたね」と

いう形でしか「人間」という言葉が出てきていません。行きがかり上でしか「人間」という言葉が出ていないことに問題があります。

人間と経済がかかわることが重要なら、当然出てくるはずの言葉が全然出てきません。例えば「格差」、「非正規雇用」、「貧困」という言葉は一度も出てきません。「雇用」という言葉さえ、1回も出てきません。

ある一定の方向に向かって何かを語っていれば、当然、出てくる言葉というのがあります。今の日本の経済社会をテーマに人間を語るとすれば、この拡大する所得格差をどうするのか、こんなに豊かな経済社会で貧困生活を強いられている人がいるというのは一体どういうことか、高まる非正規雇用比率をどうするか、となるはずですが、それらは一切語られませんでした。

さらに日本の経済社会のもう一つの側面として「地方の疲弊」が問題になっています。しかし、成長戦略スピーチのなかに「地域経済」、「地域社会」、「地域共同体」という言葉は1回も出てきませんでした。

以上のように、人間の営みであるはずの経済活動に対して、政策的な手当てをどう施すのかをテーマにすべき総理大臣の話のなかに、今の日本の人間たちが直面する状況に対する言及が一切ないことに非常に驚きました。

それとは対照的に、この成長戦略スピーチの随所に出てきた単語がありました。その単語が冒頭挙げたアベノミクスの2番目の問題点である「グローバル時代との相性の悪さ」

に直結していきます。

■ 1. グローバル時代における 経済活動

安倍首相の成長戦略スピーチに41回も出てくる単語は「成長」という言葉です。成長戦略を語るスピーチですから、そのことは別段不思議ではありませんが、それと負けず劣らず高い頻度で登場したのは「世界」という言葉です。

「世界」は37回。一国の首相、政治のリーダーのスピーチですから、目が世界に向いていないと困ります。したがって、この言葉が出ること自体はおかしくないですが、ここでも問題はその文脈にあります。

例えば、「再び日本が世界をリードする時がきた」、「再び世界の中心に、日本が躍り出ることができる」、「世界最高水準を目指す日本」、あるいは「世界一企業が活動しやすい日本を目指す」、「世界大競争に打って出ていく日本」、さらには「世界を席卷する日本」という言い方も出てきました。

安倍政権の成長戦略とは、世界制覇戦略なのでしょうか。そのことにアベノミクスのグローバル時代との著しい相性の悪さ、親和性の低さを感じます。

この話をひも解くには、グローバル時代とは、そもそもどういう時代なのかを踏まえなければなりません。

それを考えるにあたり、今、私たちが住ん

でいる場所を「グローバルジャングル」と名付けてみます。国民・国家的な垣根が非常に低いハードルとなり、ヒト・モノ・カネが容易に国境を越えて飛んでいきます。いわば国境なき地球規模のジャングルです。

そこを出発点とすると、まず脳裏に浮かぶイメージは、弱肉強食、淘汰の論理になります。日々の生存競争をジャングルの住人たちは戦い抜いていき、強い者が勝ち、そして勝った者だけが生き延びることを許されるという強者の生存論理です。そういう場所だと思えば、ここを強烈な競争の場所とすることに、イメージ的な矛盾はありません。

しかし、もう少し俯瞰して全体像を捉えた時にみえてくるのは、「共生の生態系」です。同じジャングルの住民である以上、強いも弱いも大きいも小さいも、すべての者がそれぞれの役割を果たし、お互いに支え合い、助け合うなかで、生態系が初めて維持される、そういう力学が間違いなく働いています。

確かに強い者が勝つという事実はありません。しかし、このジャングルには強い者しかいないわけではありません。動物であっても、ヒョウやワニといった強きものが、自分たちよりも弱いものを完全に食い尽くしてしまうことはしません。それをやっつけてしまえば結局、自分の生存もまた危うくなるからです。それがまさにジャングルの掟なのです。

弱肉強食よりも重要なジャングルの掟は、共生の生態系を維持することです。再生産可能な形でこそ、循環が維持されていくわけで

す。人は誰も1人では生きてはいけないということが、ジャングルをジャングルたらしめているルール、根源的な掟なのです。

私たちも共生の生態系としての性格を強めています。いまや盛んに「グローバルサプライチェーン」という言葉を使うようになりました。「グローバルバリューチェーン」という言葉もしばしば使います。幾多の国境を越えて、あまたの企業がお互いに組み合わさることによって、一つの製品をグローバルマーケットに送り出していくという力学、論理のもとに、ものづくりやサービスの提供が行われているのが、今のグローバルジャングルの実態です。

かつては、「Made in Japan」の製品といえば、どうしても外国から調達しなければならない材料以外は、ゼロからすべて純正日本製部品や素材を使い、国内で組み立て加工され仕上がったものでした。その最終製品が国境を越えて日本の外に出ていく構造です。すなわち「Made in Japan」は、「Made by 日本企業」が当たり前の世界でした。

「浦島太郎の経済学」が、取り戻そうとして後ろ向きに見ているイメージは、かつてのこの時代を指しているように思えます。

しかし、いまやそういう状況ではありません。日本製品であっても、日本国内で加工され製造されている比率は、どんどん低くなる傾向にあります。

そうになると、古来私たちが使っていた言葉「福は内、鬼は外」を考え直さなければなり

ません。今のようにサプライチェーンが国境を越える状況になると、一体どこまでが内であって、どこから外が始まるのかという話になります。見極めが簡単ではありません。中国やベトナム、カンボジアにある日本企業の工場が、果たして日本経済にとって内なのか外なのかは簡単に決められる話ではありません。まさに誰も1人では生きていない状況です。

いかにこの長いサプライチェーンのなかで、お互いに企業、国が依存し合っているかを私たちにはっきり示してくれたのが、東日本大震災後の姿でした。

震災後、福島県の一つの部品工場、小さな部品メーカーが操業不能に陥りました。その結果として、世界中で自動車の生産が止まる展開になったことは記憶に新しいと思います。世界を代表するような自動車メーカーといえども、一つ小さな部品工場という小動物の存在がなければ、活動を貫徹することができないのが現実でした。

これが現実であるにもかかわらず、グローバルジャングルでは自己責任によって完結する者が一人勝ちすると思いがちですが、よく考えるとこれは違います。誰も1人では生きていけず、皆が一つの生産体系、経済活動体系のなかに組み込まれて、お互いに相手をあてにして生きているのがグローバルジャングルです。これが根源的力学だと考えます。

そうだとすれば、安倍政権の成長戦略である日本が世界一になる、一人勝ちをするとい

う発想は、グローバルジャングルの住人としては相容れない発想ではないでしょうか。自分が1番になるためには、他の人たちを蹴散らかさなければならず、相互依存体系のなかでそれをやろうとすると、はた迷惑であると同時に、自滅にもつながります。

つまり共生の生態系としてのジャングルの掟と、世界一という発想は親和性が低いと言わざるを得ないと思っています。

■ 2. グローバルジャングルの中で

グローバルジャングルでは、言い換えれば誰もが誰かから何かを借りて命を維持しているのが現実であるということです。

それでは、もう一步踏み込んで考えた時に、その貸し借りの対象となっているものは一体何なのでしょう。その対象物の正体を考えてみたいと思います。

対象物は二つあります。一つは「ふんどし」一つは「土俵」です。

実は「人のふんどしで相撲をとる」スタイルで生きている国が、このグローバルジャングルの中には数多く存在します。

その筆頭に挙げるべき国はどこかといえ、私はルクセンブルクだろうと思います。ルクセンブルクといえ、人口が50万人にも満たない小さな国です。

しかし、世界のお金持ち国家、豊かさランキングなどをみると、必ずといっていいほど上位、トップ5に入っています。非常に小さ

な国でありながら、大いなる豊かさを手に入れている国といえます。なぜそんなことが実現できるのかといえば、「人のふんどしで相撲をとる」のが極めて上手だからです。

周囲のヨーロッパ諸国をはじめ外の世界に向かって門戸を開き、世界中の企業に来てもらっています。大きな国際会議をするなら、ルクセンブルクで開くのが最も快適だと、様々な施設を用意しています。国民は皆、1人5カ国語ぐらいを平気で話すので、スムーズにコミュニケーションができます。企業の本社をここに置いても、スムーズにことが運びます。世界中の国、有力企業、人を集め、相撲をとってもらうことによって大いなる富を手に入れています。

ルクセンブルク以外にも、ベルギー、オランダ、スイス、オーストリア、アイルランドなどもそういう国です。これらの国々では、特にアメリカの多くの企業に工場を建ててもらい、生産活動をしてもらっています。決して「Made by Ireland企業」ではないのですが、「Made in Ireland」ではあるという製品が世界中にどんどん出ています。いわば内なる外の力によって富を稼いでいるスタイルの国です。

ヨーロッパに限った話ではありません。アジアで「人のふんどしで相撲をとる」のが最も上手な国といえば、シンガポールでしょう。世界中のために、シンガポールがオフショアセンターになってあげましょうと、どんどん世界中からヒト・モノ・カネを引き寄せてい

ます。香港や台湾も同じ部類に属しているといえます。小さな国が大きな相撲をこうした格好でとっているという現実があります。

もう一つ、人のふんどしではなく「土俵を借りる」という国のスタイルも、グローバルジャングルではなかなか上手な生き方であるといえます。

土俵を借りて相撲をとらせてもらうケースには、大別すると二つのやり方があります。一つは自国の人々を外の世界の土俵に送り出し、そこで相撲をとらせてもらうやり方です。自国民が世界に散らばり出稼ぎをしてくるということです。

このスタイルを追求してきた一つの事例は、フィリピンです。フィリピンは出稼ぎ労働によって、自国経済のレベルアップを実現しています。

むろんそれに伴う様々な問題も出てきています。例えば、出稼ぎに行った先で人権侵害的な扱いを受ける問題や、頭脳流出などは、フィリピンにとって頭の痛い問題です。しかしいずれにせよ、こうした出稼ぎ収入を得るようになって、以前に比べ著しく所得水準が上がっているのが現実です。

土俵を借りて相撲をとるやり方は、もう一つあります。自国の金を外の土俵に送り出す方法です。資本が世界に出て行って収益、または利子、配当を稼ぎます。こうした借り物の土俵で生きるスタイルもあります。

実はこうした生き方が前面に出ているのが日本という国です。日本はいまや世界に冠た

る資本輸出大国です。ジャパンマネーが世界の土俵に出ていき、さらにマネーを稼いでいます。こうして稼いだ金のおかげで、日本の経常収支は今なお黒字ポジションを維持していることは周知の事実です。

つまり今の日本の経常黒字は、物の輸出によって稼がれているのではなく、日本の金在国外で稼いできている所得です。この実態は、日本経済が富を生み出す仕組みの大きな構造的変化を表しています。

それに加えて、今度はアベノミクスのもとに、国家戦略特区制度が展開されることになっています。

この特区制度は、基本的に人のふんどしで相撲をとるためのものです。日本固有の話ではなく、多くの発展途上国でも同じようなことをやっています。外国企業に対して「この特区内であれば法人税ゼロです、他にも様々な優遇しますので、ぜひここに来て相撲をとってください」と誘致しています。

安倍政権の特区政策も同様です。特区においては、英語で診療を受けられる病院を用意する、英語で教育を受けられる学校もつくる、従業員を容易に解雇できるような特別扱いもするとうたっています。

これは先進国がやることなのかという疑問が残るものの、この制度自体が別段悪いわけではありません。解雇の弾力化には問題が残りますが、良し悪しではなく、そういった「人のふんどしで相撲をとる」典型的な政策だということがいいたいわけです。

要するに今の安倍政権下においては、一方で人の土俵、つまり世界にジャパンマネーを送って稼がせてもらう展開を進行させながら、その一方で、特区制度で人のふんどしも相撲をとろうとしているということです。土俵もふんどしも他人（外国）から借りて、日本経済を世界一にしようという発想です。

逆にいえば、ふんどしも土俵も外国から借りるのに、その外国を差し置いて自国だけが世界一になろうということを宣言するのは、あまりにも虫のいい話ではないでしょうか。

こうしたことから、安倍政権の経済運営について、これは「ドーピング大作戦」ではないかと思えます。薬物を日本経済に注入して、促成的、短期的、人為的、幻想的なる筋肉増強効果を絞り出している気がして仕方ありません。

まずは「アベノミクス」という言葉が第1の薬物。これはいけるのではないかと思わせる言葉を投げ与えます。「3本の矢」という言葉が第2の薬物。そして第3番目の薬物が「異次元金融緩和」です。「異次元」というたいそうな言葉で煽ります。「国家戦略特区」というのも、次の薬物として出てきています。

さらには東京オリンピックまでも薬物の一環として使おうとしているのではないのでしょうか。安倍政権の周辺には、東京オリンピックを別名「アベノオリンピック」と称している人もいます。こんな感じでどんどん煽っていくというのは、やはりよろしくないのではないかと考えます。

■ 3. 「シェア」から「シェア」へ

では、グローバルジャンルの住人にふさわしい、本来あるべき行動原理とはいかなるものでしょうか。

グローバルジャンルのなかに「住人基本心得」があるとなれば、それは何かということを決める最後のテーマとして考えてみたいと思います。

住民基本台帳ならぬ住人基本心得を、二つのジャンルから整理するとどうなるのでしょうか。

一つの切り口として「掲げるべき合い言葉」について、次に「目指すべき場所」とは何かについて考えてみます。

まず、掲げるべき合い言葉は、私はすなわち「シェアからシェアへ」という言葉だと思います。シェアからシェアと、同じ言葉を繰り返しているではありません。

「シェア」という言葉を聞かれた時、金融証券の業界におられる方の多くは、「市場占有率」のことだと思われるでしょう。ある一定の年齢から上の世代の方は、反射的に市場占有率が浮かぶと思います。「我が社は、この製品に関して世界ナンバー1のシェアを誇っている」、「この業界で生き抜くためには、もっと市場シェアを高めていかないとやっていけない」こういう形で使われる時の「シェア」という言葉は、確かに「市場占有率」を意味します。

しかしながら、この言葉にはもう一つのまったく異なる意味もあります。比較的若い世代の方は、そちらをイメージされるかもしれません。もう一つの意味は、親しいお友だちと食事に行った際にたくさん注文をして、「これは皆でシェアするから、取り皿をくださいね」という形で使う意味の「シェア」、つまり「分かち合い」という意味です。

「市場占有率」は、奪い合いの対象となります。誰かからシェアを奪わなければ、自分のシェアは高めることはできません。それに対して、料理を分け合うのは、「分かち合い」のシェアです。一つの言葉に、奪い合いのシェアの側面と分かち合いのシェアの側面があるということです。

つまりグローバルジャングルの住人であるということは、すなわち共生の生態系のなかで生きていくことです。奪い合いのシェアから分かち合いのシェアへと発想を切り替えていかなければなりません。

もちろん妍（けん）を競う高品位の力のせめぎ合いという意味での競争もまた、グローバルジャングルの華やかな側面ではあります。根底には、奪い合いのシェアではない分かち合いのシェアが生きていてこそ、その土台の上に立った競い合いが初めて可能になります。

したがって、「奪い合いのシェアから分かち合いのシェアへと発想を切り替えていこう」という合い言葉を共に掲げて進んでいく姿勢が求められているのではないのでしょうか。

もう一つ、目指すべき場所について考えてみましょう。これは先の合い言葉を掲げながら、いかなる場所を目指すのが正解なのかということです。私は「多様性と包摂性が出合う場所」ではないかと思います。

包摂性とは日頃あまり使わない言葉ですが、包容力と言い換えてもいい。懐深く、広く、様々なものを抱きとめる力、それが包摂性です。大いなる包容力をもって、お互いに抱きとめ合うことで包摂性が高いといえるのです。

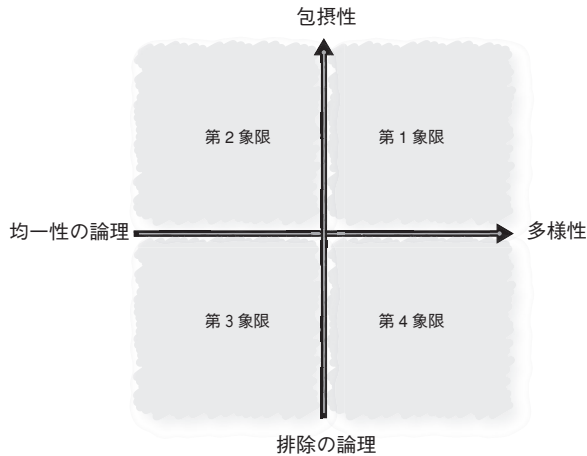
高き包摂性と多様性が出合う場所——グローバルジャングルの住人たるもの、そこを目指すべきではないでしょうか。「シェアからシェアへ」という合い言葉を掲げながら、「包摂性と多様性が出合う場所」に向かって進んでいければ、グローバルジャングルで首尾よく共生の生態系を実現し、維持することができると思っています。

では、この「包摂性と多様性が出合う場所」の形について、もう少しイメージを膨らせるために、頭に座標平面をイメージしてもらえればと思います。

縦軸が「包摂性」の軸、横軸が「多様性」の軸。包摂性の軸は上に行けば行くほど包摂度が高まっていく。下に行けば行くほど低下して、「排除の論理」が前面に出てしまう。多様性の軸は、右に行けば行くほど多様性が高まり豊かになり、左に行けば行くほど低下し、「均一性の論理」が前面に出てしまうということになります。

この座標平面上で一番右上、第1象限が目

イメージ図



指す場所です。それに対して残りの三つの象限がどのような場所であるかといえば、第2象限に行くとうなるのでしょうか。この場所は原点から上にありますから、「包摂性」はしっかり確保されています。しかしながら、原点から左ですから、「多様性」は低下して「均一性の論理」が前面に出ています。私はどうもこの場所が今までの日本の位置だったのではないかと思います。今でもそういう側面があるのではないのでしょうか。

終身雇用、年功序列、護送船団方式など、日本的経営あるいは日本の経済社会を特徴づけて表現する熟語がありますが、これらの言葉が意味していることは、要するに「包摂性」はそれなりにあるということです。年功序列で終身雇用なのは、誰も置いてきぼりにはしないということ、それにもまして護送船団はその典型です。誰かを置き去りにしてどんどん船体が行ってしまうことはしないというこ

とですから。

これまでの日本の経済社会は、置いてきぼりをつくらないことで成り立っていました。出る杭は打ち、陥没している杭は持ち上げて、皆で一緒にいこうとする、「包摂性」の極めて高い経済社会でした。

その一方で、「包摂性」の懐に抱きとめてもらうためには、あまり人と違うことをやってはいけなとされました。横並び、純化の論理に素直に従っている限りにおいて、「包摂性」の懐に抱いてあげるといことです。人と違う動き方をしてはいけな、人と違う姿形を志向してはいけな。そうした志向に走らない限り、この「包摂性」のなかで生きていくことが許されるという世界が、今までの日本であったといえます。

次にこの理想郷の真下、右下の第4象限です。ここがどういう場所であるかといえば、「多様性」はしっかり確保されている。しか

しながら、「包摂性」は低く「排除の論理」が前面に出てきてしまっているということです。私は残念ながら、今のヨーロッパがこの方向に行っている気がします。ヨーロッパといえば「多様性」の世界です。様々な民族、文化的背景の人たちが押し合いへし合いをしています。

しかし、押し合いへし合いをしながら仲よく共存するのではなく、互いに「排除の論理」が出てきているのがヨーロッパの現状であるといえます。どうしてそうなっているのでしょうか。なまじユーロという単一通貨を存続させなければいけないということで、本来は多様な人たちが窮屈な同じ行動パターンを強いられています。あるいは一蓮托生で動くことを強いられ、ことのほかドイツとその他の国々との関係がぎくしゃくしてきています。

ドイツの人たちは謹厳実直、真面目に一生懸命節約に励み、額に汗して働いて、だからこそ経済規模も大きく、経済的実績もいい。そういうドイツが、自分たちはこんなに頑張っているのに、なぜあんなにいいかげんな南ヨーロッパの人たちを救済するために金を出さなくてはならないのだと怒っています。

その一方で、南ヨーロッパの国々の人は、ドイツ人は金を出すからといって、箸の上げ下ろしにまでうるさい。皆ドイツ人と同じにならなきゃいけないと、とんでもないことを求めてくるといって、いがみ合っています。

こうした現実は残念なことです。決定的な決裂がその先に横たわっていないことを望み

ますが、そのような心配もしなければいけない側面も出てきたということです。

ここで最後に残った第3象限の話をしませぬ。理想郷と対極にある場所です。「包摂性」は低く、「排除の論理」が強まっている、そして「多様性」も抑制され「均一性の論理」が前面に出る世界です。

市民としては絶対に行きたくない場所です。もしこの象限に各国がどんどん行くとなると、グローバル時代の終焉を意味します。グローバルジャンглの共生の生態系は、たちどころに砂漠と化してしまうのです。

この場所を何と名づけるか。右上がグローバル時代の理想郷、桃源郷、その隣が今までの日本、そして右下が今のヨーロッパであるとすれば、一番行きたくない左下の場所は何でしょうか。さしずめファシズム帝国ということかと思えます。大阪市がそこにいないか心配です。

ここに行ってしまったら、もう容易に後戻りできません。しかし、この「シェアからシェアへ」の合い言葉を掲げつつ、皆で一緒にこの「包摂性と多様性が出合う場所」に到達することができれば、まさにグローバル時代の本当の姿が開花します。現実には、障害物が多く困難な状況ですが、市民や民間の力で是非この理想郷にたどり着きたいところです。

時間がまいりました。

(本稿は当研究会主催による講演における講演の要旨である。構成：桜木 康雄)